

静岡文化芸術大学 図書館・情報センターだより

温故知新

Shizuoka University of Art and Culture Library News

2021.12 Vol.39

令和3年12月発行

発行所 静岡文化芸術大学 図書館・情報センター
〒430-8533 浜松市中区中央二丁目1番1号
TEL(053)457-6124 FAX(053)457-6125
<https://www.suac.ac.jp/library/>

Contents

■表紙

時代碗大観 ①

■図書館散歩

アンビバレンツ、ハママツ、ユウウツ ②

芸術文化学科長 教授
奥中 康人

俯瞰から触感へ ③

一書物、先達、都市をめぐる連環

デザイン学科 准教授
天内 大樹

■特集

わたしの1冊 ④
～おすすめの本を紹介します～

■巻末

図書館ニュース ⑧



時代碗大観（帙）



國寶高臺寺時繪碗（汁碗）

時代碗大観 松田権六、羽野禎三[編]

第1輯 限定版
文化出版局, 1972（現在、絶版）

[752/Ma 74]

漆は、古くから日本や中国に於いて金属や木工の塗装用として用いられてきました。建造物から工芸品まで幅広く使われ、漆は日本の伝統や文化を語る上で欠かすことができません。その中で、日本の食文化に於いて確固たる地位を築いてきたのが漆塗りの器（漆器）です。今回は、漆器の中でも一番よく使われる「碗」の名品を集めた一冊をご紹介します。

『時代碗大観』は、日本各地の名碗を紹介した図書で、宝雲舎から1939（昭和14）年に刊行されました。当館で所蔵しているのは、1972（昭和47）年に復刻版として文化出版局から発行されたものです。本書は「第1輯」で、続編の刊行も計画されていましたが、戦災により資料が焼失してしまったため、実現には至りませんでした。

本書では、実物大の碗の断面図（解析図）と、復元された碗の写真が解説付きで掲載されています。詳細な説明書きの薄紙と実寸大の図解が2枚1組で構成される、全64編の大作です。本書の序文には「新案の古典より生る可きは先覺の既に唱導する處、吾人亦思を是に致すこと歳あり」とあります。これは、新しい漆碗を生み出すために、古来の碗を綿密に見直すことを目的とするもので、まさに漆器の「温故知新」です。

本書の編者である松田権六（1896～1986）は漆芸家で、文化勲章を受章した人間国宝です。蒔絵の第一人者として知られ、「漆の神様」を意味する「漆聖（しっせい）」と呼ばれました。本書とならび漆碗の名著と評される荒川浩和[編輯・解説]『漆碗百選』でも、冒頭には松田権六による序文「お碗を語る」が掲載されています。

参考資料：

漆工史学会[編]『漆工辞典』[752.033/Sh 34]
荒川浩和[編輯・解説]『漆碗百選』[752/A 63]
文化庁[企画]『蒔絵：松田権六のわざ』（昭和46年度 工芸技術記録映画）[752.6/Ma 74]
NHKアーカイブス「NHK人×物×録：松田権六」（2021年12月4日参照）
https://www2.nhk.or.jp/archives/jinbutsu/detail.cgi?das_id=D0009250143_00000



芸術文化学科長 教授

奥中 康人

Okunaka Yasuto

文章中で紹介した資料

浜松史跡調査顕彰会
『浜松市大地図
大正七年調製編纂図 復刻版』
092.9/H 24

ゼンリン
『ゼンリン住宅地図（静岡県）浜松市』
092.9/H 24

JTB/ブリッキング
『るぶ 浜松浜名湖三河』
092.9154/R 87

松立学[編]
『これでいいのか静岡県浜松市：
「出世」で推し進める浜松の野望』
093.021/Ma 75

『BR@ND』
（ヒューマンステーション 2011～）

荻原通弘、木村英昭[編著]
『赤羽駅前ピンクチラシ
性風俗の地域史』
673.94/O 25

北川祐[著]
『ヤマハ残酷物語：
社員残酷物語・音楽教室の疑惑、
販売店いじめ…』
582.7/Ki 63

川上源一[著]
『音楽普及の思想』
760.4/Ka 94

河合滋[著]
『風雪十五年』
582.7/Ka 93

三浦啓市[著]
『日本のピアノメーカーとブランド：
～およそ200メーカーと
400ブランドを検証する～』
763.2/Mi 67

早川タナノリ[著]
『「日本スゴイ」のディストピア：
戦時下自画自賛の系譜』
210.7/H 46

アンビバレンツ、ハママツ、ユウウツ

浜松市民になって10年が過ぎました。授業では、たいてい浜松の悪口を言っています。学生さんたちは「あの人、浜松が嫌いなんだ」と思っているかもしれませんが、いえいえ、まったく逆。深い愛情の裏返しです。「“大嫌い”は、時に“大好き”を意味する」という人情の機微を、20歳前後の皆さんにはそろそろ察してほしいものです。

この大学に着任して早々、美術館の近くにある古書店で『浜松市大地図 大正七年調製編纂図 復刻版』を買いました。古地図散歩は楽しいです。しかし、この地図で、本学の周辺を散歩するのは困難です。この界隈は100年の間に激変したので、本学がどこにあるのか分らないからです。とはいえ、馬込川や現存する寺社をヒントに、およその位置を推測することはできます。逆に、この地図があれば、現在の浜松に100年前の名残を発見することも可能で、たとえば、船越町には大正時代の道がまだ少しだけ残っています。

同じ古書店で、1960～70年代の浜松市街図も、ときどき買い求めています。遠州鉄道奥山線は1964年まで現役でした（クリエート浜松の廃線跡は、ご存知ですか？）。この図書館が所蔵する『ゼンリン住宅地図』なら、バブル崩壊後30年の変化を、より詳細にたどることができます。Google Mapの時代に、あえて紙の地図を手にとり散策してみると、たくさんの商店や町工場が消えたことも、よくわかります。

数年前から、JTBの『るぶ 浜松浜名湖三河』のバックナンバーも集めるようになりました。1990年代から現在までの表紙を並べてみるだけで、浜松が観光客に対して何をプレゼンしてきたのか（でも、それほど魅力ある観光地ではないこと）が、一目瞭然とわかる貴重な資料です。あの「ゆるキャラ」に費やしたお金は、結局どこに流れたのでしょうか。「出世」という大昔のワードが、21世紀の私たちに響くと思っているのでしょうか（ミュージカル映画の名作「君も出世ができる」の公開は1964年）。でも、「「出世」で推し進める浜松の野望」というサブタイトルを持つ『これでいいのか静岡県浜松市』はオススメです。

千歳・有楽街あたりで手に入る『BR@ND』は、100年後には間違いなく浜松の繁華街を民俗学的に研究するための第一級の資料になりうることを見越し、創刊号（2011年4月）からずっとコレクションしていました。でも、置き場所に困るようになり、3年前に挫折。どなたか、集めた約80冊を引きとってくれないませんか。国立国会図書館にも所蔵されていない激レア雑誌です（『赤羽駅前ピンクチラシ 性風俗の地域史』には圧倒されました）。

「音楽」は、「出世」よりも深いレベルで浜松を支配してきたマジックワードです。1980年代以来、多くの浜松市民は「音楽のまち 浜松」という惹句で思考停止に陥っているように見えます。呪縛を解くには、たとえば『ヤマハ残酷物語』を一読してみたいかがでしょう。また、2つの楽器メーカーの、強烈な個性をもつ経営者の著書『音楽普及の思想』や『風雪十五年』も、クリティカルに読まれるべきです。

「音楽普及」とは、結局のところ「大量生産される自社の西洋楽器販売」であり、消滅の危機に瀕する伝統邦楽や和楽器製造（マイノリティ文化）の将来については、大企業の眼中にはありません。少子化で縮小する日本市場の次は、中国、東南アジア、南米がターゲット。それらの土地に、リコーダー、鍵盤ハーモニカ、そしてキーボードやピアノが「普及」することで、浜松の繁栄は約束されるのかもしれませんが、しかし、それぞれの土地の伝統音楽（マイノリティ文化）を駆逐することと引き換えなら、手放して賞賛はできません。西洋の音楽や楽器が「普及」する前には、あたかも音楽・楽器が存在しなかったかのように（コロンブスが新大陸を「発見」したかのように）誤解していませんか。いや、自己の利益のために、見て見ぬフリをしているのか、それとも単なる無知？

「音楽のまち」ではなく、「楽器のまち」というキャッチフレーズすら、多くの楽器工場が市外・国外に移転している現状に照らし合えると、急速に過去のものとなりました。ピアノ研究者、三浦啓市氏の『日本のピアノメーカーとブランド』は、もはや包括的な把握は不可能だと思われていた国産ピアノの200のメーカー（その多くが倒産・廃業した遠州・浜松の中小企業）の400ブランドを、ほぼすべて網羅した驚異的な書籍で、著者の執念には敬意を示すばかりですが、跡形なく消えていった中小ピアノメーカーと職人さんたちを弔う墓碑銘のようにも見えてきます。合掌。

「浜松スゴイ」と褒めそやし、人々の優越感をくすぐることは簡単です。でも、たとえ嫌われても、耳が痛くなることをあえて言うことも大学のお仕事ではないかと思うのです。「日本スゴイ」への違和感を論じた『「日本スゴイ」のディストピア』も、是非ご覧あれ。

以上、私の浜松への愛が溢れるオススメ図書の紹介でした。



デザイン学科 准教授

天内 大樹

Amanai Daiki

関連おすすめ図書／登場順

小林康夫[著]
『建築のポエティクス』佐々木健一[著]
『美学辞典』ウードクルターマン[著]；神林恒道、太田喬夫[訳]
『芸術論の歴史』田中純[著]
『残像のなかの建築：
モダニズムの「終わり」に』エルウィン・パノフスキー[著]；木田元、
川戸れい子、上村清雄[訳]
『「象徴（シンボル）形式」
としての遠近法』アン・リム・ロン[著]；柴田和雄[訳]
『カッサンドル』浅田彰[著]
『構造と力：記号論を超えて』川俣正[著]
『アートレス：マイノリティとしての現代美術』カトリヌ・グラー[著]；藤原えりみ[訳]
『都市空間の芸術：パブリックアートの現在』今なら…Peirce Edition Project (ed.)
“Writings of Charles S. Peirce :
a chronological edition, v. 1-6”小田部胤久[著]
『芸術の逆説：近代美学の成立』エイドリアン・フォーティエ[著]；
坂牛卓、邊見浩久監訳
『言葉と建築：語彙体系
としてのモダニズム』『日本モダニズムの30人』
『建築文化』No. 639
(2000年1月号特集)田路貴浩[編]
『分離派建築会：
日本のモダニズム建築誕生』暮沢剛巳[著]
『世界のデザインミュージアム』ヴァルター・ベンヤミン[著]；浅井健二郎[編訳]
『蔵書の荷解きをする 蒐集の話』
『エッセイの思想』

俯瞰から触感へ——書物、先達、都市をめぐる連環

現行だと学科別に開講される「学芸の基礎」の前身に、当時の6学科から数人ずつ新入生を集めたクラスを、いずれかの学科教員1人が指導する「文化芸術総合演習」という科目があった。文芸大新入生を串刺しして個々の関心を伸ばすこの科目を新任初年度に引き受けた筆者は、これは自分が担当するため作られた科目ではないかと勘違いしたものだ。筆者の関心の範囲と文芸大のカバー範囲が、大きさはともかく似た形だと思ったのだ。今も文芸大図書館そのものが自分の本棚だと勘違いしている。だから居酒屋で注文を聞かれると言下におすすみを尋ねる客が嫌なのと同じく、この図書館の本は全ておすすめだと言ってみたいが、考え直すと居酒屋でメニューの右から左まで頼むわけにはいかないし、自身が学部生のとき大学図書館を使いこなせたとは到底思えない。ちゃんと思い出してみよう。

高校時代から、後に駒場で伝語を教わったヤスオ先生の『建築のポエティクス』、本郷でたぶん目を掛けて下さったササケン先生の『美学辞典』、関西に出入りするようになってお話しできた太田先生訳のクルターマン『芸術論の歴史』など、小金井市立図書館で借りて覚えている本が多い。入学後も、学内だとレポートの季節に目当ての資料が貸出中になると思い、地域の図書館を頼った。例えばタナジュン先生の課題だとパノフスキー『「象徴形式」としての遠近法』などである（顧みると公立館にあるということに驚く）。文芸大「学芸の基礎」と同趣旨の授業で扱ったポスター作家の資料も都立図書館から借りた。大学入試の英単語集さえジャケ買いしていた筆者にとって、最近の文芸大と違って本のカバーを外して棚に並べる大学図書館の魅力は乏しかったと思う。『構造と力』のような超有名本は手垢に塗れ、建物自体も新築移転や改装拡張の前であった。自宅生で多少お金に余裕があり、生協書籍部も充実していたから、比較的購入が多い学生だったと思う。卒論も現代美術を扱ったので、そもそも図書館に蔵書があまりない話題、例えば公共芸術の新たな位置づけを論じた本は、結局ナディッフで買ったのではなかったか。

しかし本郷で大学院に入ると、とはいえ新築の駒場図書館に、今の研究状況からすると古い部類に属するパースの著作集を読みに通ったが、全く歯が立たずに2年を過ごした。停滞の修士課程生活を再起動させるべく、指導の小田部先生は、すでにフォーティエ『言葉と建築』の翻訳に加わっていた筆者に、日本の近現代建築を主題として薦めてくださった。それでまず手に取ったのも『建築文化』の特集号だったから、雑誌に馴染んでいたのだろう（そもそも大学を選ぶときも朝日新聞社のムック本『〇〇学がわかる。』シリーズを好んで読んでいたのだ）。今や建築論を展開する媒体はほぼウェブに移り、日常の意思疎通や情報収集と同じ席・画面・ルーティンで、改めて読むべき記事に出くわすことになった。この変化は学術論文でも同様で、結局腰を据えて後で読むこともなくやり過ごしがちである。

この事情もあり、自分の研究を超えた範囲の語り手として街に出て振る舞う機会を就任当初からいただくと、最新の論文や雑誌記事より、書物に収まった体系（少なくとも体系性への意志）を手に取り、コンパクトに頭に納めることが多くなった。繰り出す先の街自体、体系性はともかく何編かの書物といえよう。先日亡くなられた万年橋パークビルの鈴木基生さんは、筆者に限らず人を浜松の街中に導く司書の役を果たされたと思う。筆者は、浜松の街中自体が文芸大のキャンパスだと勘違いしているが、基生さんの文芸大生への信頼にも筆者以上の面があり、彼自身についても掘り起こせば本を編めただろう。なのに筆者自身は、街に出て体系で人々の認識を支えるより、描ける将来像を取り留めなく申し上げるばかりだったと、基生さんにお別れを告げるときに実感した。筆者自身が体系を欠くのではという、単著と留学歴がないことに並ぶ劣等感が立ちはだかる瞬間である。

ヤスオ先生は駒場の院生にブックサイズの仕事をしろ、論文サイズに収まるなと焚きつけていたらしい。筆者は大学教員としてのめくるめく日々のうちに、改めて単著サイズの体系を築く必要に迫られている（分離派建築会を扱った学位論文は、共著などで大体の論点を発表したもので、そのままでは出版できない）。浜松に来てデザイン史の範囲の広さと体系性の乏しさを実感し、これも自分の背負った課題と認識している。その糸口がデザイン博物館研究だが、せめて体系性への意志がないと、実践の人も頼れないだろうと感じる（天内研はともかく、建築史研究室から建築の実践者が輩出されるように、デザイン史研究室からデザインの実践者が輩出されるだろうか）。ベンヤミンが紹介するに、最も優れた蔵書の入手方法とは自ら著すことだという考えがある。次に文芸大の図書館に入るおすすめの本は筆者がこれから書く本だという勘違いを公にして、自分を駆り立てよう。

特集 わたしの1冊 ～おすすめの本を紹介します～

『チャイナドレス大全： 文化・歴史・思想』

謝黎 [著]

青弓社, 2020

[383.15/Sh 11]



みなさん、今日着ている服はどのように選びましたか？「好きなモデルと同じコーデがしたかったから選んだ。」「このスカートはGUで安かったから買ったものだ。」いろいろな理由があってその服を選んだはずです。服装は自分がどんな人間であるかを示す手っ取り早い手段の一つだと私は考えています。

私がこれから紹介する本は、チャイナドレスにまつわる文化・歴史・思想について記されています。チャイナドレスと聞くと、セクシーで女性らしい身体の曲線が強調されるワンピースを想像されるかと思います。そんなチャイナドレスが中国の女性解放運動と結びついていることはご存じでしょうか。

今日、女性の身体は本人の表現の自由に属すると考えられます。しかし、かつての中国人女性たちにとっては、そうではありませんでした。かつての中国では、身体は美しいものと見なされておらず、むしろそれを隠すことが美しいと考えられていました。女性であれば女性の身体らしい胸のふくらみは隠すべきものであるため、「束胸（胸をベストのようなもので縛り付ける行為）」をしていました。かつての中国人女性の身体は、「痩せて細くて、弱い女性が美しい」という美意識による倫理的規範に縛られた社会的身体でした。しかし、その後の変革期以降の中国では、「個」や「自我」を志向するようになります。女性たちは、男女平等を目指し男性の衣装を着用し始めます。この男性衣装は、現在イメージされるチャイナドレスの形とは違いますが、チャイナドレスが生まれるきっかけになりました。そして、女性解放運動の中で「女性の自我の主張」のために、女性の身体を表現する現在のよう女性のボディラインを強調するチャイナドレスが生まれました。美しいチャイナドレスの形には、中国人女性たちの自立の思想が込められているのです。

あなたの着ている服もきっとあなたが今どんな時代を生きているかを表しているはずです。自分の生活を囲む衣類がどんな意味を持つかを知れば、より一層その服に愛着がわくのではないのでしょうか。

【文化政策学部 国際文化学科 2年 宮部 紗綾】

自分が生まれる前の日本の歴史、特に戦後以降の歴史については授業でも最後に取り扱われるため、時間が足りず結局勉強しないままの場合が多いのではないのでしょうか。私自身もあさま山荘事件や連合赤軍といった言葉は聞いたことがありましたが、具体的にどんな事件や組織だったのか、この本を読むまでは何も知りませんでした。これは学部四年生になり、卒論のテーマでテロを扱うと決まった時にゼミの先生が薦めてくれた本でした。

海外のテロ組織を研究対象としていた私にとって、日本にもそういった組織が存在し、実際に事件が起こったことは衝撃的でした。海外の空港で日本人が銃を乱射したり、飛行機をハイジャックしたりするなんて…と信じられない気持ちになりました。しかも、最終的に十数人が死亡した残虐な「粛清」に関わった多くの人々は私と同じくらいの大学生でした。

私が未だに忘れられない、現在も研究を続けたいと思ひ修士課程に進む一要因ともなった最後の節を一部紹介します。「あとから考えてみても、ここでとどまるべきだったと言える明確な地点などどこにもない。…われわれ全員が、連合赤軍事件のような悲劇の、被害者にも加害者にもなりうるのである。」私はテロを起こす人、テロリストと呼ばれる人たちは異常な人間ではなく、誰もがテロリストになる可能性を秘めているのではないかと考えています。テロリストを擁護する気は全くありませんが、9.11後によく聞くようになった「テロに屈しない」という言葉への違和感は徐々に膨らんでいるように感じます。なぜ彼らは武器をとったのか、爆弾を身に纏ったのか、もしかしたら自分だったかもしれない彼らのことを想像し、分析し、研究することが、単にテロリストを罰するよりも未来に起こりうるテロを防ぐ第一歩になるのではないのでしょうか。

【大学院 文化政策研究科 1年 松本 真史】

『死へのイデオロギー：日本赤軍派』 (岩波現代文庫；社会；84)

パトリシア・スタインホフ [著]；

木村由美子 [訳]

岩波書店, 2003

[309.31/St 3]



特集 わたしの1冊 ～おすすめの本を紹介します～

「漢字が難しい」日本語を学習する多くの外国人は、そう言います。振り返れば、日本語を母語とする私たちも、子どもの頃から漢字の学習に多大な時間と労力を割いてきたのではないのでしょうか。まず、漢字は画数が多く形が複雑です。その上、常用漢字に限っても、他の文字とは比べものにならないくらい数が多いです。更に日本語の漢字の多くは、1つの文字に対し複数の読みを持っています。しかし、日本語を難解にしている最大の要因は、なんとと言っても漢字の音を使った単語、つまり漢語（字音語）の存在にあるように思います。

本書では、「本来、言語の実体は音声である」にもかかわらず、日本語における漢語は「音を聞いただけでは意味が通らず、文字を思い浮かべなければ意味が確定しない」という点で極めて特異なこと、またそういった漢語が明治以降、西洋化の中でいかに多く出現していったのかが述べられています。

「『学校のカイダン』って、なんで『階段』なの？」「『カイダン』って、そのカイダンじゃなくて、怖い話のことだよ」

「『センシンコク』って何？」「経済とか技術が発展している国のことだよ」

「経済って何？」「技術って何？」「発展って何？」・・・

子育ての中でも、そんな会話は日常茶飯事でした。小学生になってある程度正確に文法を身につけるようになってからも、漢語については漢字の習得を待たなければ、基礎的な語すら理解できるようにならないものなんだ、とつくづく感じました。

近年、日本には外国にルーツを持つ児童・生徒も増えています。一見、問題なく日本語ができるように見えても、生活言語とは違った学習言語にまずくことは多く、やはり漢語の存在が理解を阻む大きな要因となっているように感じます。

著者は、「漢字は日本語にとってやっかいな重荷である」が、「これなしにはやってゆけない」と述べています。確かに、我々はこれからも漢字と付き合っていくほかありません。しかし同時に、非母語話者にとって漢語がいかに大きな負担となっているかを改めて認識する必要があるのではないかと。本書を読んで、そんなことを考えさせられました。

【文化政策学部 国際文化学科 教授 佐野 由紀子】

『漢字と日本人』 〔文春新書；198〕

高島俊男〔著〕

文藝春秋，2001

[811.2/Ta 54]



『お家さん』 〔上巻、下巻〕

玉岡かおる〔著〕

新潮社，2007

[913.6/Ta 78]



大学時代の恩師で日本経済史の大家、中村隆英先生は授業でよく大正から昭和初期にかけてのお話をされていました。資本主義の黎明期であった当時、日本一の年商を誇り、三井三菱を凌ぐ勢いであった「鈴木商店」という総合商社の話が度々出て、作家の城山三郎がこれを書いている*、と嬉しそうに話していらっしゃいました。実際に読んでみましたが、私にはそれほど面白い内容ではなかったように記憶しています。

それから随分経って、ある時偶然手に取った小説が、同じ鈴木商店を舞台として描いた小説『お家さん』でした。城山三郎が鈴木商店の「表舞台」で活躍する大番頭、金子直吉の活躍や米騒動へ至る経緯などを中心に描いているのに対し、玉岡かおるの『お家さん』は鈴木商店を「奥」で支え、かつ社長でもあった妻の立場から、その歴史を描いています。この対比は実に面白く、同じ出来事でも様々な問い方、描き方ができるのだなと感心しつつ一気に読みました。ダイナミックな経済社会の変動と、1人の女性の人生航路を通じた心理描写が面白く、『お家さん』はテレビドラマにもなったようです（読売テレビ開局55年記念ドラマ、天海祐希主演）。

ところで、『お家さん』のように女性の人生を描いた面白い小説に出会う度に、私は無力感にさいなまれます。データを収集、分析して女性のライフコースなどに関する論文を書くことが多いのですが、情報を抽象化し一般化することはできますが、人間の真理に迫ってくる小説というものに比べ、それほど人々を魅了するものではないからです。複雑な人間社会における暮らしや心のヒダを巧みに描写する「ことば」というものが、いかに高度で柔軟なツールであるかということを年々強く感じるようになっていきます。私は小説家のように、自分自身で物語を紡ぎ語るといったような才能はありませんでしたが、「データを用い、データに語らせる」ことについては、ある程度素養があったようで、それでなんとか論文を書いている、そのような感覚で仕事をしています。

*城山三郎『鼠：鈴木商店焼打ち事件』（文春文庫：新装版）文藝春秋，2011

【文化政策学部 文化政策学科 准教授 小林 淑恵】

『日本のいちばん長い日：
運命の八月十五日』

半藤一利 [著]
文藝春秋, 1995
[210.75/H 29]



いまから20年前、「24-TWENTY FOUR」という米国のドラマが話題になりました。キーファー・サザーランド演じるジャック・パウアーが連邦政府の機関でテロと戦う物語です。ドラマの時間の進み方と、実際に視聴者が見ている24時間と同じ時間が流れます。日本でも徐々に火がつき、DVDで全巻「一気見」する友人もいました。

一方、敗戦から20年後の1965年、1945年8月15日の玉音放送に至る日本の24時間を描いたのがこの本です。1時間毎に刻々と変わる情勢を、当時の史料や関係者に取材して克明に描いています。まさに「リアル」な24時間。その場に一緒に立ち会っているかのような感覚になります。玉音放送に係わった関係者の手記や日記を渉猟するだけではなく、直接関係者に取材して証言の裏付けを取る徹底振り。

私たちは8月15日に玉音放送があり、戦争が終わったことを知っています。歴史の教科書にもそう書いてあります。しかし、実際は粛々と進んだ訳ではなく、極度の緊迫下、軍内部でもそれぞれの思惑が錯綜していました。結論を知っているにも係わらず、終戦工作に向けた24時間がどちらに転ぶかわからない、薄氷を踏む状況であったという緊張感が文面から伝わってきます。

大学に入り歴史を専攻し、歴史の叙述は当時書かれた原典に当たることを徹底してたたき込まれ、誰かが後世に書いた「もの」ではなく、当時の史料に深く潜り歴史像を構築する大切さを学びました。史料には生き証人が語るオーラル・ヒストリーも含まれます。本書はそれを遺憾なく発揮しています。

文藝春秋研究会の中心人物は今年1月に亡くなった半藤一利。玉音放送に携わった政府高官、軍幹部や宮中の人物、玉音放送を阻止しようとした人物など関係者の豊富な証言が説得力を増します。もちろん、史料や語った内容が真実かどうか、その情報の見極めや使い方が問われますが、取捨選択も秀逸。本書は2度映画化されています。読んでから見るか、見てから読むか永遠のテーマですが、本と映画どちらもお勧めです。

【文化政策学部 芸術文化学科 准教授 田中 裕二】

この本を最初に読んだのは40歳を迎えるほんの少し前で、それまで「暗黙知」という単語は聞き覚えがあってもそれを提唱した原著を読んでいないという気持ち悪さがずっとありました。正直、哲学的論考を原文でなく訳書で読むことの徒労がイヤで食わず嫌いの部分があったことは否めません。でも、新訳本の高橋勇夫氏の日本語訳は原文の持つ思考過程のもどかしさを伝えつつ日本語としてもかなり読みやすく文体がつくられており、内容を確認するために読み直すことはしばしばだったけど、時間的にはそれほどかからず読破できました。

本書の論考は非常に示唆に富んでおり、もっと早くに読んでおけば、自分が専門とする建築設計の思考にも少なからずよい影響があったのでは？と思いつつ、自分の知識体系構築の基礎があって初めて言説が腑に落ちるのであろうと感じる事柄もあり、その時がまさに読み時だったようにも感じました。それ以来、何度も読み返しているけれど、その都度、新たな考え方につながる発見に満ちています。

中身が濃く要約することももったいないのだけれど、いくつかの示唆に富む文を抜粋してみます。まず論考の冒頭で示される「私たちは言葉にできるより多くのことを知ることができる」というテーゼから始まり、人が顔を認識する方法から説明される「暗黙知」という概念への誘い方があざやかです。

また、「暗黙知」があるからこそ、問題を想起できるとするくだり「・・・問題を考察するとは、隠れた何かを考察することだからだ。それは、まだ包括されていない個々の諸要素に一貫性が存在することを、暗に認識することなのだ。・・・中略・・・偉大な発見に導く問題を考察するとは、隠れている何かを考察することでもあるのだ。・・・中略・・・ある発言が真実だと認識するということは、言葉として口にできる以上のことを認識することらしい。」は、直感的推論から本質的解決にいたることの多い建築設計プロセスにも適用可能な考え方で、大いに励まされることになりました。

この本は、著者が行った大学での講義が元となっていて、まだ理論化される前の「暗黙知」に基づく発想が、大学の講義を通じて言語化・体系化されていく過程を追従できるという意味でも示唆に富んでいます。人が未知のものを考えるということ、あるいは発想することが、なぜ可能なのかを端的に示しており、知性というものの本質をしっかりと捉えています。大学に着任した今年も読み返し、また様々な発見がありました。

【デザイン学部 デザイン学科 准教授 丹羽 哲矢】

『暗黙知の次元』
(ちくま学芸文庫)

マイケル・ポランニー [著]；
高橋勇夫 [訳]
筑摩書房, 2003
[081/C 441/H010-1]



特集 わたしの1冊 ～おすすめの本を紹介します～

寝つきの悪かった私を寝かしつけるため、父はよくお話を聞かせてくれました。今でもよく覚えているのは、動物たちが近所の公園に集まって、楽しそうにボール遊びをするというお話です。私がおすすめしたい1冊は、ショヴォー氏が自身の最愛の息子に語った物語を書き起こした短編集『年をとったワニの話』です。

特におすすめしたい物語は、タイトルにもなっている「年をとったワニの話」です。リウマチを患った年寄りのワニが主人公となっています。狩りができなくなったワニはひこ孫を食べてしまい、家族から逃げる形で住み慣れたナイル川を後にします。ワニは海でタコと恋人関係になり、魚を毎日恵んでもらうようになります。しかし食欲を我慢できなかったワニは、自分のために魚を獲ってくれるタコを食べてしまいます。その後、ワニはナイル川上流に住む黒人たちにあめられるようになり、毎日生贄の娘を食べられる生活が始まるところで話は終わります。

恋人を食べたワニについて、作中ではこう述べられています。「恋人を食べたいという欲望が、あまりにも強くて、どうしても、食べずにはいられなかった。なんとも、あわれなワニだ。タコは、とても美味しかった。だが、食べ終わってしまうと、ワニは後悔のなみだを流した」。ワニがどんな気持ちで恋人を食べたのか、ふと考えることがあります。ワニは食欲を抑えられないが故に居場所を失い、しまいには恋人さえ自分の手で殺めてしまいます。この物語は極端ですが、自分のやりたいことを優先した結果、周りの人を傷つけてしまった経験は誰にでもあると思います。

「年をとったワニの話」には、特に深い意味はないのかもしれません。私が父から聞いた話にも深い意味はありませんでした。これらは、子どもを楽しませるために考えられた点で共通しており、読んでいると不思議と温かい気持ちになります。この本を通して親御さんの優しさを懐古してみてもいいのではないでしょうか。

【大学院 文化政策研究科 2年 宮崎ガブリエル マコト】

『年をとったワニの話』

レオポルド・ショヴォー〔作〕；

出口裕弘〔訳〕

福音館書店、2002



『月とコーヒー』

吉田篤弘〔著〕

徳間書店、2019



月とコーヒー？なんだか美味しそうだな…と題名に惹かれ手に取った一冊ですが、物語の世界で感じるものを思い出したくて時折り読み返す、こちらの作品を紹介したいと思います。

二十四篇のお話からなる短篇小説です。国（惑星）も登場人物や動物も様々な、夢と現実の狭間で物語が進んでいきます。著者の吉田篤弘さんは、寝しなに読む短いお話として、この先どうなるのだろうと登場人物たちの行く末に考えをめぐらせるうちに、いつのまにか眠っているといいな、という思いで書かれたそうです。この紹介文を寄稿するため昼間に読んでいますが、随所にあらわれるお月様とコーヒーの影響もあるのでしょうか、まぶたが重くなってきました。

そして、作中には絶妙な塩加減の料理の数々が登場します。「クリーム・シチュー、サンドイッチ、エクレア、五目炒飯、赤いジャムを塗ったパン…」と他にも。これだけを見ると、寝る前なのにお腹が空いてしまうではないか！とお思いいなる方がいるかもしれませんが、作中の描写と温かなやりとりで心が満たされ、深夜の飯テロが脳内で繰り広げられることなく眠りにつけます。

それはさておき、タイトルの『月とコーヒー』とは、著者が小説を書いていく上での指針としている言葉だそうです。生きていくために必要なのは「太陽とパン」の方かもしれないけれど、なくなってしまったら、日常がじつに味気なくなってしまう存在として表されています。私達の学生生活において、課題や制作、研究など目に見える結果や評価に繋がるものを日々追っていることが多いと思います。そういった日常でも、とるに足らないかもしれない「月」側のものが、誰しもあるのではないのでしょうか。片隅に置いたとしても失くしてしまわないよう、美しく静かな言葉で紡がれた世界がつなぎ留めてくれます。

ハードカバーにしては手のひらにしっかりと馴染むこの一冊と、優しい料理を添えた物語で一日の終わりを迎えてみてはいかがでしょうか。

【大学院 デザイン研究科 1年 横田 理絵子】

館内でのイベントのご紹介

「科学」に関する啓蒙イベント「照明・明かり」の展示

サイエンス(科学)は、我々の生活の指針となり、課題に立ち向かうための力を与えてくれます。サイエンスに興味を持ち、サイエンスを理解することは、人生に面白味を加え、人生を豊かにすることにもつながります。

このような趣旨から、複雑で一見難しいと思われがちな「サイエンス」に関する話題を、「デザイン」の工夫によって分かりやすく伝える試みを、平成30年度より図書館の展示スペースにて開始しました。平成30年度の「電磁波(電波、光、放射線等)」、令和元年度の「視覚」に続き、デザイン教育と関わり深い科学の分野である「照明・明かり」をテーマとして、図表と書籍を中心とする展示を令和2年度末より行いました。照明・明かりは、我々が日常生活で接している身近な装置であり、また人類の文化やデザインの歴史を考える上でも重要な要素と言えます。

展示スペースには、照明・明かりの仕組みと歴史を整理した横5.2m、縦1.2mの横長図表を掲示し、図表の前に、関連する書籍約30冊(本学図書館所蔵の書籍及び個人蔵の書籍)を陳列し館内で自由に閲覧できる状態にしました。図表は、上段に代表的な9つの照明の仕組みをイラストと文章で説明し、下段には照明が急速に発展した19世紀を中心にして照明に関する様々なトピックスを歴史の順に並べました。

両学部で実施した本展示に関するアンケートからは「照明に興味が出た」「図表が見やすかった」「本学の授業では文系の分野の内容が多いが、今回の展示は理系の分野に触れる良い機会になった」等の意見が得られました。今後も継続的にサイエンスに関する展示を行っていく予定です。

文化・芸術研究センター長
デザイン研究科長 教授
的場 ひろし



「照明・明かり」の展示(展示スペース)

主催：

静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター

企画運営：

的場 ひろし

(文化・芸術研究センター長、デザイン研究科長 教授)

企画協力：

三村 秀典(静岡大学電子工学研究所長 教授)

井山 弘幸(新潟大学人文学部 教授)

内藤 康秀(光産業創成大学院大学 准教授)

横田 浩章(光産業創成大学院大学 准教授)

制作協力：

望月 麻衣(大学院 デザイン研究科 修了[2020年3月修了])

柴田 頼人(デザイン学部 デザイン学科 卒業[2020年3月卒業])

吉田 紫穂(デザイン学部 デザイン学科 4年)

※ご所属・肩書は2021年3月時点のものです

ポスターでみる20世紀 1950-1990

「時代と写す鏡」とも言われるポスターのデザインは、19世紀の後半からの印刷技術の発展にともない、広告・宣伝媒体としてめざましい展開を遂げた分野でした。グラフィックデザインは、ポスターの隆盛とともにひとつの表現領域として洗練され、それを専門とする優れたデザイナーも多数誕生しました。

図書館・情報センターでは、メディアステーションのリニューアルにともない、本学が所蔵する限定復刻された20世紀の名作ポスターコレクション“The 100 best posters from Europe and the United States 1945-1990”からの定期的な展示を開始しました。

今回は社会的課題をテーマとして制作されたポスターの名品をご紹介します。今日の世界にも結びつくような問題について、デザイナーたちはなにを感じ、ポスターというメディアを通して、それをどのように表現し発信したのでしょうか。

静岡文化芸術大学では令和2年度、創立20周年を迎えるにあたり「アーカイブズセンター設置のための基本構想」の検討が開始され、アーカイブズ資料となりうる記録や収蔵物の調査を開始しました。本学におけるアーカイブズ資料は、法人運営に関わる会議資料・議事記録、研究・教育分野に関する資料、貴重書物、およびデザイン関連資料などに分類できます。このうち、デザイン資料については、教育資料としての活用に加えて、デザインを通してその時代の社会背景等をビジュアルに学ぶことのできる資料として展示を行うことで、教育・研究への貢献を考えています。

ポスターコレクション展示についても今後、デザインアーカイブズの一環として定期的にテーマを変えながら展示を継続し、それぞれの時代を反映した、多くのポスターを紹介していきたいと考えています。

図書館・情報センター長
デザイン学部 デザイン学科 教授
伊豆 裕一



ポスター展の会場(メディアステーション)

主催：

静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター

企画運営：

伊豆 裕一

(図書館・情報センター長、デザイン学部 デザイン学科 教授)

佐井 国夫(デザイン学部 デザイン学科 教授)

迫 秀樹(デザイン学部 デザイン学科 教授)

谷川 真美(文化政策学部 芸術文化学科 教授)

水谷 悟(文化政策学部 国際文化学科 准教授)

井出 直樹(事務局 情報室 図書係)

展示協力：

横地 敬(実習指導員 [技術員])

梶木 鈴香(デザイン学部 デザイン学科 4年)

藤田 結花(デザイン学部 デザイン学科 3年)

企画協力：

樋澤 明(凸版印刷株式会社)